

生文研メール

15 号

平成 23 年 11 月 28 日

Ver. 1.1.5

生活文化研究所

〒700-8516

岡山市北区伊福町

2-16-9

ノートルダム清心女子大学

e-mail

ricch@post.ndsu.ac.jp

目次

日本人と海藻のかかわり (15)	今田節子	1
海藻の食文化と農耕文化のかかわり		
体験的生活文化史 昭和編 その十五	新田義之	2
昭和七年の映画『侍巾着切り』のこと		
西鶴研究こぼれ話 15	広嶋 進	5
不思議な出会い その十五		
室津海駅館の琉球人行列図	横山 學	6
お知らせ		8

日本人と海藻のかかわり (15)

海藻の食文化と農耕文化のかかわり

今田節子

四半世紀近くにわたり、我が国における海藻の伝統的食文化に関する調査研究に携わってきたが、常に頭から離れなかったことは、海藻は海からの

授かり物であるにも関わらず、海藻を食文化の視点で捉えていくと、農耕文化とのかかわりが深いということである。農耕文化とは「食物の基盤を農耕に置く、人類の生活文化全般をさす」とあるから、海藻もこの一環に組み込まれたものであるという見方ができる。「日本人と海藻のかかわり」を終えるにあたり、最後に海藻の食文化形成の背景の一つとして、農耕文化との関わりについて考察を進めてみたい。

前号『生文研メール』14号)でも触れたように、海藻の採取・加工保存・日常食および非日常食への利用という一連の海藻にまつわる食習慣は、比較的漁業規模の大きい専業漁業地域よりも半農半漁村や近隣の農村を中心に営まれてきたように感じられる。高桑守史は現在存在する半農半漁村について、近世に入っておかず採り漁業や肥やし採り漁業に従事した農村に基礎を置くもので、漁業技術の革新や動力船の導入は一九三〇年代に入ってからのことであると述べている。日頃の食材料である魚貝類や海藻を得るために、また田畑の肥料とするために海藻類を採取する程度に海との

関わりを持ちながら、稲作や畑作を営んできた農村が半農半漁村の基礎にあるというならば、伝統的海藻の食習慣の随所に農業に関わる生活習慣が反映されていても不思議はない。そして半農半漁村とはいえないものの、近隣の農村地帯においても食材料や田畑の肥やしに利用するために、農業の合間をぬって年中行事のように海藻採取を行う、この程度の海との関わりを持ってきたという話は聴き取り調査中によく聞かれたことである。

このように農業と漁業の両方に関わった生活のなかで、生活の知恵として農作物と海藻を合理的に組合わせた加工保存法や料理法が工夫され、習慣化されたものが伝承されてきたものと考えられる。例えば、富山県朝日町では、灰干しワカメに、稲を脱穀した後わらを浜に持ち寄り、共同作業で焼いた稲わらの灰が使われた(生文研メール3号)。瀬戸内沿岸地帯のイギス料理には、稲作地帯では米糠が、畑作地帯では大豆の粉や大豆の茹で汁が使われ(『生文研メール』7号)、ヒジキやアラメのあく抜きには各家庭の菜園で栽培していた柑橘類や梅が食酢の代用として使われた(『生文研メール』14号)などは代表的な例である。さらに、畑作と海の両方に関わりを持つ生活は、Sea Vegetable のことが示すように海藻全体を食料とし、野菜と同様の料理法で食す日本独自の海藻の食文化を生み出す大きな背景となったといえよう。

海藻にまつわる神事や磯行事にも、農耕儀礼との類似性が高い。農耕儀礼は、日本においては稲作に関するものが多いが、豊作を祈って行われる儀礼・祭事で、予祝儀礼から収穫感謝祭に至るまで、農作物の生長段階に応じて営まれる一連の儀礼をいう。稲作儀礼に比較して海藻にまつわる神事は決して多いとはいえないが、海藻の豊漁祈願や収穫の感謝祭に当たる神事が行われてきた。福岡県の早鞆神社や山口県の住吉神社、島根県の日御碕神社や宇竜の熊野神社のワカメ刈り神事はワカメの豊漁を祈願する神事である。ワカメの新芽を神前に奉納し、その年のワカメの豊作を祈る行事で、ワカメ刈りの口開けにも関連する行事である。島根県では各家庭でワカメの刈り始めには神前に若芽を供え、豊漁を祈ったと聞いている。そして、感謝祭にあたるものとして島根県十六島の紫菜島神社の神事をあげることができる。ノリの採取が終わる旧暦二月の初午のころに行われる。この地域には農家が土地を個人所有するのと同じように、ノリの自生する平らな岩場を個人名義で代々世襲する「島もち」の制度が存在し、年の暮れには祭りを主宰する頭屋を島もちのなかから決め、神事が行われる。この島もち制度といい、頭屋行事といい、農村地帯で行われてきた神事に共通点が多い行事であるといえよう。

もう一つの海藻にまつわる行事として、解禁日の磯行事をあげることができ、ここにも海藻採取

と農耕文化の関わりを見いだすことができる。磯は漁家だけでなく近隣の農家にとってもおかず採りや田畑の肥料を採る場であり、子供達にとっても遊び場であった。なかでも海藻や磯ものが収入源となる漁家にとつては大切な仕事場であり、乱獲防止や資源保護を目的として禁漁期間や禁漁場所が設けられ、その禁漁が解かれる日が「磯の口開け」である。磯の口開け行事は、「磯遊び」「磯たて」「海おり」「すがたつ」「島がたつ」など様々な名称で呼ばれていたが、行事の内容は、海藻採取の解禁日に、漁家・農家を問わず全住民が総出で海藻採取を行う行事であった。長崎県五島列島の三井楽町で聞いた例を紹介してみると、ここではフノリやマフノリの解禁日に磯の口開けと磯相撲の行事が行われ、漁家・農家を問わず住民全員で一斉に海藻採取合戦が行われ、その後、子供や大人による磯相撲が浜の神様に奉納された。この磯相撲は海藻の豊漁を祈願する行事といわれ、お祭りの要素も強かったと伝えられており、白米のおにぎりなどのごちそうを囲んで地域住民の交流や親睦がはかられたという。ヒジキやテングサの口開けの行事を行う地域では、住民総出で採取した海藻の収入は村の公費に当てる地域も多くみられた。これらの事例からも分かるように、海藻にまつわる磯行事は、豊漁祈願や安全祈願はもとより、漁家と農家の交流や親睦の場であり、それを通して培われた人間関係は日頃の海藻採取を円

滑に行うことに繋がっていったものと思われる。行事の最初に漁家と農家を問わず一斉に海藻採取を行い、両者の交流が行われる磯の口開け行事の背景に、沿岸地帯においても近隣の農村地帯においても比重は異なるものの共に農耕と海の両方に関わってきた、このような生業形態のなかで培われた生活の知恵をみるように感じられる。

このように海藻の加工保存法や料理法だけでなく、海藻にまつわる神事や磯行事に農耕文化との関わりを見いだすことができる。日本の伝統的な海藻の食文化の基層には稲作や畑作、農耕儀礼を取り巻く農耕文化の存在があり、海藻は食物の基盤を農耕に置く生活文化の一部に組み込まれた形で、海藻の食文化は形成、完成されてきたといえないであろうか。このような背景が世界にもまれな日本独自の海藻の食文化を生み出してきたといっても過言ではなからう。

【参考文献】高桑守史「農民漁業と海民漁業」『歴史公論』第十巻五号、雄山閣（東京）、一九八四、四八～五四頁。今田節子『海藻の食文化』成山堂（東京）、二〇〇三。

体験的生活文化史 昭和編 その十五

新田義之

日本の殆どの大学は一学年度を二つの学期に分け、四月から始まる夏学期を前期とし、十月から始まる冬学期を後期としているが、ヨーロッパで

【写真1】



は反対に、冬学期から新しい学年度が始まる。前回に書いた通り私たちがハンブルクに着いたのは九月下旬だったので、実際に講義が始まるまでにはしばらく時間の余裕があった。その間に私たちは市役所の外国人係で滞在許可証を貰い、それぞれの大学の入学手続きを終え、指導教授の所に挨拶に行ったり、受講する科目の申請や所属する研

【写真2】



究室に顔を出したりして過ごした。当時のドイツの大学には入学試験がなく、高等学校課程修了認定試験（アビトゥア）に合格していればドイツ国内のどの大学にも入ることができた。もちろん総合大学がすべて国立であったから、このような学生採用法が可能であったのだが、ここぞときめた大学の事務所にアビトゥア合格認定

【写真3】



書を提示して学生登録を行ない、学生証と受講記録手帳とを貰えば、この大学のどの学科でも受講できた。もし自分の求めるものがこの大学では得られないと思えば、次の学期には別の大学に移るということも自由だった。極端に言えば、夏学期は涼しい地方の大学で学び、冬学期には暖かい地方の大学に移るといふことさえ可能であった。

その上「卒業」という制度がないので、必要な経費さえ払っていれば、自分から学生を辞めると言わないかぎり何年でも在学出来る。五十年間学生の身分を守った人がいたという嘘のような実話が残っているほどである。だが半面、特定の職業に携わる能力を認定する国家試験（ディプロム）に合格した段階で大学を辞め、役人や企業などが行なう採用試験を通過して専門職につくか、さもなければ学位請求論文を提出し、口述試験（面接試験）を突破して学位（ドクター）を得、研究者の道に入るかなければ、大学で学んだからと言って、社会生活につながる何の保証も得られない。ある意味では緩やかだが、本当の意味で厳しい制度だったのである。

この自由と自己責任の重さを大切にする大学の理念こそが、かつてのドイツの大学制度の誇りであったが、しかしそれはもう半世紀も前の話で、第二次世界大戦の後に大学入学志望の学生の数が激増し、かつての少数エリートの研究の場という前提条件が成り立たなくなった現在では、ほぼ全面的に制度上のほころびが出て、日本などで行なわれている各大学の主体性に基づく入学試験制度の長所も、合わせて採用しないわけにはゆかなくなっているようである。

本題にもどると、ヴェンク先生のお世話で入ることの出来た下宿は、レンガ作りのアパートの一階にある小さなコンパートメントで、台所とシャ

ワーとトイレのほかに部屋が二つあるだけの住居だった。二間の内の一つには家主である若い職業婦人とその婚約者が住み、もう一つを私たちに貸したのである。私たちの部屋にはベットと長年放置されていたアップライトピアノとタンスと椅子およびテーブルがおりてあり、それに石炭ストーブと大きめの窓が一つだけあった。ベットにはシーツが敷いてあり、羽根布団もあった。窓にはレースカーテンと、厚い生地のカートンとがかかっていた。ピアノは内部にたまったゴミをすっきり掃き出し、弦の調整をしたら、何とか音がでるようになった。台所、シャワー、洗面所などはすべて家主と共用である。シャワーは付設のボイラーに水をいれ、ブリケット（棒状の練炭）で沸かすと、ちょうどボイラー一杯分のお湯がでるが、それが終わると突然に冷水に変わるの、そのタイミングを会得するのにはしばらく苦労した。家主たちは勿論冷水をかぶるだけで、お湯などは使わない。

そんな生活にようやく少しずつ馴れて、何とか落ち着いて講義の始まるのを待つばかりになった頃、日記を調べてみると九月二十六日のことだったが、日本学科のギュンター・ヴェンク教授が自宅に招いて下さった。

先生のお宅は市の中心部から地下鉄で二十分ほど行った郊外にあった。日本流に言えば五百坪ほどの敷地に住宅と菜園と作業用の小屋があり、ゆ

ったりとした自然な雰囲気が漂っていたが、この家は先生が自分ひとりで数年かけて建てられた文字通り「手造り」のもので、設備も電気の配線にいたるまで先生がされたのだそうである。菜園も先生と夫人とで土を耕して作られたご自慢の畑と果樹類であり、そこには色々な種類の野菜や果物が実っていた。ドイツの大学教授たちにはこうした菜園や、あるいは果樹園などを家族みんなで世話をし、野菜を収穫したり、果実酒を作ったりして楽しんでいる人が少なくない。ゆったりとした気持ちの余裕と豊さを保ちながら、学者としての過酷な知的労働に携わって行けるのは、社会の文化的成熟度の高さから来るのか、それとも個人の資質の問題なのか、いずれにしても若かった私たちには、このような先生方の生き方が自分たちの将来像を描くための一つのお手本のように感じられた。

こうしてハンブルクにおける私たちの留学生生活が始まった。収入はその頃（一九五九年）ドイツ学術交換協会を通して招待留学生に支給される奨学金が一月三百五十マルク（日本円に換算すればほぼ三万五千円）だったので、文字通り非常に苦しかったが、その内に日本の商社のハンブルク支店などから通訳や翻訳の仕事の依頼が来るようになって、何とか凌いでゆけるようになった。「写真」は前述のアパートで、入口の左手三つめが私たちの部屋の窓である。すぐ前がタクシーの

溜り場で、昼も夜も呼び出しの電話が鳴ってうるさかった。しかしこの道に沿って流れる川は市の中央にあるアルスター湖につながる運河で、水も美しく、魚釣りをする人たちもいたほどである。「写真2」は私たちの部屋の内部だが、お客は横浜からマルセーユまでの船旅を共にした牧師でプロテスタント神学者の山路基先生。ゲッチンゲンに留学されたのだが、たまたまハンブルクに用事で来られたので、私たちの結婚記念日に招待したのである。「写真3」はヴェンク先生の菜園で撮ったスナップ。ヨーロッパと讃えられた日本語学者も、家庭では本当に優しいお父さんだった。

昭和七年の映画『侍巾着切り』のこと

西鶴研究こぼれ話 15

広嶋 進

最近のインターネットの発達はめざましい。かつて調査をあきらめていた事項を試しにネットの「単語検索」に入力してみると、思わぬ情報が手に入ることもある。

私の恩師の一人に暉峻康隆（てるおか やすたか）先生がいる（明治四十一（一九〇八）年生まれ）。先生は本格的な西鶴研究を始める前に、生活費を稼ぐために時代物の小説を執筆していた。その中には映画化されたものがあるという。先生はこう発言している。

「（大衆雑誌『漫談』の編集長から）『私小説は

売れないから大衆小説、時代小説を書け』と言われて、二カ月に一度くらいずつ時代小説を書いた。そのうちに僕の書いた『侍巾着切り』という、これは武者修業に江戸に来て巾着切りの親分と仲良くなり巾着切りのほうがうまくなった侍の話なのだが、これが、当時は水戸黄門などを演じていた人気俳優の月形龍之介の主演で映画になった。」

（この人に聞く 西鶴研究と私 暉峻康隆 『国文学 解釈と鑑賞』平成五年八月）

十八年前のことだが、この談話を読んで先生がどんな小説を書いていたのか、また出来上がった映画はどんなものなのか見てみたいと思い、調べかけたことがあった。しかし、国会図書館や大学図書館に右の『漫談』なる雑誌は所蔵されておらず、また先生のペンネームも分からず、探索自体を諦めた。

ところが先日、他の用件で日本映画のことをインターネットで調べていて、「もしや」と思い、「侍巾着切り」と入力してみた。すると画面にこう出てきた。

侍巾着切
制作・東活映画社
一九三二・〇九・二二
七巻 白黒 無声
監督 宇沢義之
脚本 三村伸太郎
原作 翁三清

撮影 小柳京之助

出演 月形龍之介 中野かほる 阪東太郎

右のデータによれば、「侍巾着切」は一九三二（昭和七）年九月に「翁三清」の原作を名脚本家の三村伸太郎が脚色し、月形龍之介が主演している。暉峻先生の発言と照らし合わせてみると、「翁三清」は先生のペンネームだった可能性が高い。

そこで続いて「暉峻康隆『侍巾着切り』と検索をかけてみた。今度は、ある古本屋の目次目録が現われた。

「暉峻康隆 「ああ！侍巾着切り」 『別冊文藝春秋』一〇四号 昭和四十三年六月」

先生は、映画化された自作小説のことをすでにエッセイに書いていた。さっそくこの雑誌を注文する。そこに暉峻先生は次のように綴っていた。

「その頃駿南社から出ていた大衆雑誌『漫談』の編集部には友人が、へたなアルバイトをするよりはと、時代小説を買ってくれることになった。

ところが調子に乗って時々四、五十枚の読物を書きはじめたが、どうにもうしろめたいので、翁三清というペンネームを使うことにした。江戸の水商売女の言葉で、およしなさいという意味である。五、六編書いたところで、『侍巾着切り』という作品が、当時売り出し中の月形龍之介主演で、映画になってしまった。」

このエッセイから①先生は駿南社の『漫談』という雑誌に（大学卒業後の昭和五年以降）「時々」

「四、五十枚の読物」を書いてしたこと②「翁三清」というペンネームを使っていたこと③「五、六編」書いたところで『侍巾着切り』が映画化されたことが分かる。

暉峻先生のペンネームが判明したので、インターネットの検索に「翁三清」「駿南社」「漫談」「稀観本雑誌」などと入力してみた。すると『漫談』の目次の写真がカラー写真で出てきたのには驚いた。そこには次のようにあった。

○『漫談』巻三十一 昭和七年一月

翁三清『好色徒然草』

○『漫談』巻三十二 昭和七年二月

翁三清『江戸の敵』

○『漫談』巻三十四 昭和七年三月

翁三清『侍巾着切』

○『漫談』巻三十三 昭和七年十二月

翁三清『畜生兵法』

『漫談』という雑誌に「翁三清」は三本の時代小説を書いていた。先生は「五、六編」時代小説を執筆したと言っているから、他の雑誌にも書いていたであろう。

さきのエッセイによれば『侍巾着切り』の映画化を巡っては後日談がある。

「それ（自作の時代小説が映画化されたこと）がバレてしまつて（師の山口剛先生に）呼びつけられ、映画になるくらいなら、その道でやって行けるだろうから、いい師匠を世話してやろう。おれ

にはその方の面倒は見られないから、今日でお別れだ。しっかりやれ、と一本つけて祝っていたのだ。いたのには、心底から参ってしまった。」（同右エッセイ）

二十四歳の暉峻青年は、山口剛先生に時代物の小説を書くならば破門すると言われ、小説執筆を「ぶつつり」とやめた。そして「研究と評論に専念することになった」というのである。

右のエッセイは映画の公開の話で終わっているが、実は映画封切りの十六日後の昭和七年十月八日に先生の師である山口剛先生は逝去している。結果的に山口先生は暉峻先生に「研究に専念しろ」という遺言を託したことになった。

周知のように昭和七年前後は激動の時代であった。

・昭和四年 小説『蟹工船』刊 映画『大学は出たけれど』公開

・昭和五年 昭和恐慌 小説『ある除夜』（武田麟太郎）刊

・昭和六年 満州事変 国産初のトーキー映画『マダムと女房』公開

・昭和七年 満州国建国宣言

・昭和九年 国際連盟脱退通告

この時期、映画は無声映画からトーキー映画に変わろうとしていた。そして小説『侍巾着切り』が刊翌月の昭和七年四月には、無声映画の弁士たちが映画界始まって以来のストライキを決行した。

その争議団長は須田貞明（黒澤明監督の実兄）であった。武田麟太郎の『日本三文オペラ』（昭和七年六月）には長屋の住人の一人にこの争議団長をモデルにした男が登場している。

このように昭和の初年は、プロレタリア文学と大衆文学と映画の時代だった。

暉峻先生に「純文学と大衆文学」（昭和五十四年）という好論文がある。小説執筆をあきらめてからも、先生の心から大衆文学に対する興味と関心は終生離れることはなかったのである。

不思議な出会い その十五

室津海駅館の琉球人行列図

横山 學

国立歴史民俗博物館で、「行列からみる近世祭礼・行列・見世物（仮称）」が来秋から展示される予定です。近世という時代の、大名・祭礼・外国人など、それぞれの「行列」の意味するものを考えてゆこうという企画です。わたくしの担当は琉球国使節で、絵巻物から一枚物形式までの行列図を見直しているところです。

数年前に第三室（近世）の展示リニューアルが行われ、ハワイ大学宝玲文庫にある登城行列図（二巻）の電子画像と精巧な複製品が展示されています。これは、宝永七年（一七一〇）度の琉球国使節が将軍に拝謁するために登城する様子と、

琉球楽器の詳細を描いた絵巻です。大英博物館にも狩野春湖が描いた同じ年度の行列図があり、精緻さにおいてそれが最も上質なものです。しかし残念なことに何枚にも切り離されおり、全貌は確認されていません。したがって、宝玲文庫のものが現在見ることの出来る最も良い行列絵巻だと考えています。より古いものとして、寛文十一年（一六七二）度のものがやはり宝玲文庫にありますが、一巻本の短いものです。これらの絵巻物仕立ての行列図は、幕府や大名がお抱えの絵師に描かせたもので、使者たちの人名や官職、持ち道具、献上物、行列の順序、規模などは文献史料と正確に符合しています。美しいばかりでなく、外交の記録としての意味がありました。絵巻物を目にしたのは、大名家や幕府の一部に限られた人びとであつたでしょう。

歴博の展示準備が始まったのと同じ頃、兵庫県にある資料館「海駅館」から、秋に開催される「琉球使節の江戸上り」展で話して欲しいというお誘いがありました。教育委員会の方々と展示資料について検討した際、ひと組の行列図（刊行物）が話題になりました。以前からWebで見て気になっていたので、打合せを兼ねて見せて頂きに当地へ出かけることにしました。岡山からは山陽自動車道を東へ走り、赤穂ICから国道250号線に入り、相生湾を眺めながら播磨灘に張り出した岬の西側の室津に至ります。室津は古くから

要港として栄えてきました。近世には、参勤交代の大名ばかりでなく外国人使節も、この港に宿を取りました。本陣が六軒もあつたとのこと。港町特有の、道幅の狭い町並みは、長い歴史を伝えています。

かつて、使者の日記である「儀衛正日記」を細かく読んで、天保三年度の琉球国使節の行程表を作成したことがありました。往路は、十月十二日に備後鞆港、十三日に備前岡山直島、十四日に播州姫路領室港に着船、とあります。翌十五日、曇天で小雨の中を出船して、兵庫に向かいました。復路は、向かい風で航行に難渋しました。翌年正月十八日に大坂川口を出帆。押し船に助けられて明石港に着いたものの九泊し、二十八日に押し船で室港に入りました。翌二十九日、引き続き押し船で直島へ向かいました。海駅館には、同年のものではありませんが本陣（薩摩屋）の宿割帳が残されています。数年前、琉球国使節展のために幾度か鞆の浦に通いました。この度は室津を訪ね、島々や遠く赤穂を眺めて、往時の「風待ち潮待ち」をしながら進む旅の時間を感じることが出来ました。

室津に残されていた行列図は、単色の墨刷りの二枚組（七十二×八百二十五mm二枚）です。合印があることから「ひと続きの物」として扱われてきたことが分かります。標題も刊記も無く、ただ行列と官職名や持ち道具の名称が記されている

だけです。海駅館では、当初は「朝鮮通信使」の史料として展示されていました。沖縄県の小野まさこ氏が訪れて、琉球国使節の図ということに変わったものです。

この様な行列図は数多く作られており、わたくしも沢山見てきましたが、この図版は初めて眼にするものでした。最初に広げて見た時、どこか違和感がありました。特に行列前半を描いた一枚目の方です。装束が、琉球国使節というよりはむしろ朝鮮通信使に近い感じを受けたのです。瞬間的に、この二枚は異なる行列図が後に繋げられたものかとさえ思いました。しかし改めてゆっくり見てゆけば、「賛儀官」「楽童子」「掌翰使」「儀衛正」などの役職名が記されており、どちらも琉球国使節を描いたものに間違いありません。一瞬でも異なる行列図と感じたのは何故なのか、その理由を考えました。

この種の行列図は、いわゆる際物です。琉球国使節が近々やって来ること知った大坂辺りの版元が、行列の人氣を当て込んで、大急ぎで刷り物の販売を考えました。雛形の行列図は手元にあつた。時間が無いので、前半と後半とを手分けして作成することにしました。二人の職人によつて書き写された下絵が、手分けして彫られました。下絵師が二人で、彫師は同じであつたかも知れません。違和感は職人の腕の差から生じたのだでしょう。あるいは手本自体がその様になっていたのか

【室津海駅館蔵 琉球人行列図（部分）】



も知れません。刊記は無いので、奉行所に届け出て許可を得たものではありません。二枚の行列図はこの様にして大急ぎで売り出されました。琉球ブームに便乗した「商品」ですから、買い手が何を求めたかが、端的に表れているのです。どんな道具を持ち、どんな楽器から異国風の音楽が流れ、どんな装束であるのかを、人びとは知りたかったのでしょう。当時その華やかさから「男性か女性か」取り沙汰された楽童子は、この行列図でも花簪まできちんと描かれています。

朝鮮通信使が瀬戸内海を通行したのは明和元年（一七六四）までで、それ以降に大船団を組んで航行したのは琉球国の使節だけでした。どちらも通行していた頃は、見物する人びとも違いを感じていたことでしょう。しかしやって来るのが琉球国使節のみとなると、装束や音楽から両者を判別することは難しくなりました。庶民にとって両者の区別はさほど重要ではなく、どちらも「唐人」だったのです。備前牛窓に「唐子踊り」という子どもの舞踊があります。朝鮮通信使を模した踊りとする説も、琉球国使節とする説もありますが、土地の人びとにとっては異国風の「唐子」だったのです。

歴史民俗博物館の展示準備のために整った行列図を見直している時に、室津の行列図についてゆっくり考える機会を得ました。両者を見比べながら、琉球国使節の渡来が江戸時代の人びとに与え

たもの、それが近代へどのように受け継がれたかという、わたくしの視点を再確認したのでした。『追記』去る十一月二十七日の室津海駅館においての講演「江戸の流行：琉球人がやって来る」で、本稿の行列図にふれました。

【お知らせ】

牧野陽子著『時をつなぐ言葉 ラフカディオ・ハーンの再話文学』、平成二十三年八月二十五日、新曜社刊。

深澤秋人著『近世琉球中国交流史の研究 居留地・組織体・海域』、平成二十三年九月二十日、榕樹書林刊。

張競著「文字と書物の旅をめぐる綺想」『東京人』特集：東洋文庫の世界、三〇三号、平成二十三年十二月号。

横山學（講演）、特別展「琉球使節の江戸上り 日本の中の外交使節」、兵庫県たつの市立室津海駅館、平成二十三年十一月二十七日。

【展示会予告】

国立歴史民俗博物館 平成二十四年度企画展示「行列からみる近世」（仮称）、平成二十四年度十月十六日火曜日～十二月九日。

【おわび】春の東北震災により用紙の入手が難しくなり、『生活文化研究所年報』第二十四輯の発行が遅れました。ご心配をおかけしました。

『生活文化研究所年報』の既刊目次と「生文研メール」（本文）は、本学のWebで一覧になれます。